

Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

施設の中に充満しているのは4つだけ。弾痕、硝煙、排莢、死体。それ以外にあるとすれば壊れた色々なものばかり。

半分はこの施設を日ごろから利用している連中、もう半分はこの施設を破壊しに来た4人の仕業。

壁や床はもちろん、天井まで広く染み渡った大勢の人間の血でできた幻想的な壁画は、見る者すべての視線を釘づけにしてしまうこと請け合いだろうが・・・残念ながらここには誰もこの作品を見てくれるものなどいない。この真っ赤な展覧会に参加した人間は全員4人の芸術家たちの力によって絵の具の材料にさせられてしまうからだ。

そんな過激な芸術家たちは今、この天高くそびえるフェイファー・ツェリザカ軍の本部施設第36階を歩いていた。それぞれが装備している画材はたくさんの作品を書きすぎて真っ赤に染まり、水では洗い落とし切れないくらいベッタリと染み込み固まっている。

「撃て、撃てえええええ！！！」

また4人の目の前からこの展覧会の観覧者が現れてくれたようだ。彼らは横一列に並んでライフルを構え、一番後ろに立って命令を出している男の掛け声を合図に一斉に発砲してきた。

本来ならばこの無数の弾丸を食らい全員ハチの巣になってしまう場面なのだろうが、そうは問屋が卸してくれない。銃声が建物内で響き渡るのとほぼ同時にジェットの持つ杖の先端が炎を吐き出し、触れた弾丸を一発残らず空中で蒸発させてしまうからだ。

そうになったら次は今日一番赤い芸術絵画をたくさん手がけているジンの出番だ。低い姿勢から床を蹴り、正面の連中との距離を一気につめた瞬間抜刀。すれ違い様に全員の胴体を真っ二つに切断すると、また床に大きな赤いシミ汚れを作ってしまった。

観覧者は立て続けに握手でも求めてくるかのように湧いてきた。正面の角からまた複数の銃兵が現れ間髪入れずに発砲、決して相手にできない数ではないが今回は順番を守って一度その場を引く。

それからジンとバトンタッチをするように後ろからもう一人の過激な画家、アゲートが走り出す。アゲートはお気に入りの鎚の先端部分、即ちこの拳骨と取っ手を外し二つの武器を両手に持っていた。右手に握った柄の方を槍投げと同じ要領で力いっぱいブン投げた。直線の廊下を疾走する一本の鉄昆はジンの脇下を通り過ぎると、一人の銃兵の腹に命中。体と貫通し、ドテっ腹に大穴を開けてやった。

一瞬だけ怯んだもう一人の銃兵に向かって一撃、加速の付いた足の裏を顔面に叩きつけるとそのまま相手の顔を足場とし跳躍、壁の向こうに隠れていたもう何人かの兵士へ左手に装備していたその巨大な拳骨を振り下ろした。

3人まとめて、床と壁にめり込み、骨やら歯やら臓物やらを一面にブチ撒けて絶命した。

連中の猛攻はまだこれで終わりにしてくれない、今度の攻撃は背後からだ。攻撃と言ってもそれはとても静かな攻撃で、その内容は物陰から孤立している二人の画家・・・ジェットとドクターへ向けて手榴弾を投げるといっただけの話だ。

手榴弾が爆発する仕組みは簡単なもので、安全ピンを外し投げるなりしてレバーが外されることで時限信管が作動し、5秒から8秒程度で爆発する。逆に言えばレバーが外れた5～8秒までの間この爆弾はただの鉄球にも等しい。

要するにそれを見たときビビって逃げた方の負けとなるのだ。それさえ理解していれば何も難しいことなど何もない、ドクターは落ち着いて落ちている手榴弾を拾い投げてきたのであろう場所へ向けて空き缶を捨てるように投擲。直後どこからか複数名の悲鳴が聞こえたかな？と思った直後・・・手榴弾は爆発した。壁の向こうから様々な破片が飛び散るのが見えた・・・固い物とか柔らかい物とか、いろんな破片が。

一人の兵士がその様子を離れたところから見ており、カタカタと身を震わせていた。あれだけの強さを持った連中と自分とでは到底太刀打ちできないと踏んだ彼は急いでこの部屋の中へ隠れ、今必死になって通信機を使って仲間に連絡を送っている最中だ。

「はぁ・・・はぁ・・・こちら36階、部隊はほぼ壊滅状態。支給増援を求めろ！」

『了解、37階以降の兵力を強化する。とにかくそっちは何とかして足止めを続けろ！』

「早くしてくれ、このままでは全員やられてしまう・・・アイツらは・・・アイツらは・・・」

「アイツらは化物だ！！！」

「・・・」

カシャンッ！

瞼を閉じたままでもまぶしいと感じるほどの光量が両目に突き刺さり、思わず顔をしかめてしまった。それがきっかけとなり、虎眼はようやく目を覚ます。

ゆっくりと瞼を持ち上げると、目の前には何もない真っ白な空間が飛び込んできた。周りを見ても、何も変わらないただただダダっ広い真っ白な空間だった。自分はその空間の中の一番端の壁にいるということだけは分かる。しかもご丁寧に自分の両手両足が太い鎖と手錠で拘束されて身動きが取れない使用になっていた。

この瞬間にようやく思い出した・・・自分は今、フェイファーの連中に捕まえられているのだと。自分の体が猫眼の姿になっていたところで肉体の記憶は共有されているから、スタンガンで気絶させられる前までの記憶はハッキリとしている。分からないのと言えど今ここはどこで、なぜ自分はこのように磔にされているのか？ということだけだ。

それはさておき、意識がはっきりしてきたら急に腹が立ち始めた。いくら猫眼だったとはいえ背後から近づいてきた敵の気配にも気づけずこんなみじめな格好をさせられるなんて・・・修行不足だったかもしれない。ここから出たら今度はもう少し精神の修養もせねば、などと考えた。

『おはよう、ようやく目が覚めたようだね？』

この部屋全体から聞き覚えのある男の声が反響した。この声は間違いなくあの忌々しいグスタフの声だ。虎眼は眉間にしわを寄せて辺りをもう一度注意深く見まわしてみたが・・・こちらからはグスタフの姿はどこにも見られない。代わりに部屋の隅角にいくつかのスピーカーだけを見つけた。

なるほど、自分は安全な場所で見下すというわけか・・・いい趣味をしている。趣味がよすぎてますます腹が立ってしまうくらいだ。

『どうだいMr.虎眼・・・いや、それとも猫眼と言った方がいいのかね？』

「人の名前を混同されるのは御免だな、俺は虎眼だ。久しぶりにこんな鉄みたいに固いベッドで寝たもんだから体の節々が痛くて仕方ない」

『そうそれは失礼、我慢してもらおう他ない』

「そうかそうか、客に対して何の詫びもないとはこれは何とも酷い宿屋だな。宿泊費くらいなら払ってやるから今すぐ俺をここから出してもらおうか？」

『御代なら結構だよ、君は我々にとって非常に大切なVIPゲストなんだからねえ』

どうも連中は虎眼のことを帰す気などさらさらないらしい。だったらこんなところからは自主的に退去するに限る、虎眼はそう決定づけると両腕に力を込めだした。連中もまだまだ読みが甘い

、一般人ならば鎖でつなげば抵抗できなくなるだろうが生憎こちらは人間の枠から逸脱した怪力の持ち主。この程度の鎖で拘束などちゃんちゃらおかしい。

．．．．．？おかしい、確かに虎眼は力を入れている。両の拳を力いっぱい握り、筋肉を膨張させてこの鎖を引き千切ろうとしている。

普段ならば虎眼にとって鎖で繋がれようがタコ糸を切るように容易く破壊できるのだが．．．

・それが今、できない。いくら力を込めようがこの手錠はビクともせず、それどころか膨張した手首の筋肉が鎖に押し負けてギシギシと軋み、皮膚が避けて血がにじみ出している始末だった。

何かおかしい．．．この鎖はただ固いだけではなく、何か別の仕掛けが施されているに違いない。

だとすれば．．．．．

「．．．貴様、俺の体に何をした？」

『ほう、今気づいたのかね？君の体には強力な筋弛緩剤を大量に投与させてもらっている。普通の人間ならば呼吸もできなくなるほど強烈な薬なのだが、キミがそれでも生きていることの方がよっぽど不思議だと本気で驚いているよ』

やはり、だった。筋弛緩剤という名前の薬物を知らない虎眼だったが、さっきからどうも体に力が入らないことから「肉体の自由を奪うことのできる毒薬」とだけ解釈した。（正しい意味はあとでドクターにでも聞いてみよう）

「貴様．．．くそっ！」

『それと言い忘れたが、キミの手足を繋いでいるその鎖も特別製でね．．．乾燥させたドラゴンの皮膚と骨、それに強化合成ゴムを重ねて織り込み鉄錠で包んだ特殊手錠なんだ。本来ならドラゴンの捕獲なんかに用いられる代物なのだが．．．君にはそれくらいがお似合いだろう？』

「．．．．フン、ここまで大判振る舞えとは嬉しくて涙が出る」

口先ではいくらでも言えたものだが今のこの状況、虎眼からしたらかなり危機的なものにほかならない。

自分の最大の武器を奪われて丸腰に等しい現状、そしてこの特殊な拘束具．．．今の自分にはこれを破壊する術を持っていない。となると本当に虎眼はここから逃げ出す手段はない、最悪なケースだった。

そうなるあまり長い時間この屈辱に悔んでいる場合ではない、ここまで徹底して虎眼の行動を封じている以上何かしらの目的があるのは容易に想像できる。ただその目的が何なのかまでは頭が回らない。

「．．．俺に何の用があってこんなことをするんだ？」

『興味があるからが半分．．．そして君は今回の実験において最高のサンプルであることが半分と言ったところかな？』

部屋中からそんなグスタフの声が響いたのと同時に、虎眼の耳が別の音を捉えた。人の声ではなく、機械的な何かが作動するような不安感をあおる気味の悪い起動音。その音はすぐそばから発せられているのに気が付き首を振ると、虎眼を左右から挟むような形で床に大きな穴が開かれていた。その穴から一体何が顔をのぞかせるのか若干緊張しながら見つけていると、暗い穴の奥から出てきたのは金属製の柱のようなものだった。銀色の支柱を中心にパイプのような金属コイルが3本巻きつけられ先端には銅色の球体がかくついていた。それが虎眼の左右にそれぞれ一対、さらに正面からも別の穴が開かれ今度は別の物が顔を出してきた。それはまるで金属パイプに開いた傘を括り付けたような、見たことの無い珍妙奇天烈な機械だった。（正しくはパラボラってやつです）正面の機械は虎眼へ狙い祖定めるかのように首を振り角度を修正すると、今度は左右の鉄柱の先端がバチバチと電気を帯び始めた。かすかに電流が肉眼で見え隠れしているところから察すると、相当な高圧電流なのかもしれない。

「電流で俺を拷問でもする気か？」

『まさか・・・言ったはずだ、キミは我々にとって重要な存在であり大切なVIPゲストなのだよ』

「それならこの物騒な機械を消してくれや、こう見えて静電気は嫌いでね」

『まあまあそんなことはどうでもいい。少し話でもしようじゃないか？』

「話？今更か？」

『今更だからだよ・・・最悪の場合、これは君の最後の会話になるのだからね』

虎眼の胸中に何か嫌な予感が舞い降りてきた。こういった場合の嫌な予感は大体的中するのが定石なので、ここは腹をくくるとしグスタフの話に耳を貸した。

『虎眼君・・・強い軍隊が最も必要としているものは何か、知っているかね?』

「・・・勝利」

『それは最終的に手に入るものだ、答えとは少し違う・・・力だ。武力だ。それ即ち、強い兵士だよ』

『強い軍隊に必要なのは常に強い兵士のみ。敵を目の前にした時確実に倒すことのできる力、敵を倒すための戦略を練るこのできる知能、そして敵を倒すための武器や兵器を操る技術、それらを兼ね備えた強い兵士が欲しいんだよ。そうでなければ戦争にも勝てないし、国獲りなんて夢の話で終わってしまう』

「分かりやすい話だな」

『だがそんな強い兵士は簡単には手に入れられないのが現状だ。1から兵士を育て上げるのには時間も金もかかりすぎるうえに、どうしても才能で左右されてしまう。全てを兼ね備えた本当の強い兵士とは我が軍の中でさえほんの一握りしかおらん』

『そこで私はこう考えたのだよ・・・強い兵士を育てることができないなら、強い兵士を物理的に増殖させることはできないか?とね』

「・・・話が見えんな」

『10年位前から夢を見始めたんだよ、現状のフェイファー・ツェリザカではまだまだ力が足りない。近い将来、我が軍はドルゴ大陸へ進軍するつもりでいるのだが・・・生憎そのための力がまだ不足しているんだよ』

「国内の半分の武力を握っているくせに、よく言えたものだな」

『褒め言葉として受け止めよう・・・私の考えは今言ったとおり、強い兵士の増殖・・・砕いて言えば人間の複製だよ。理想的な強い兵士をたった一人育て上げたとして、それ以降はその兵士を何人も何人も複製して、真の最強軍隊を作り上げたいんだよ』

「人間の複製・・・どこかで昔聞いたことがあるな、「クローン」だったか?」

『その通り、クローン人間の大量生産・・・それが私の夢だ。より強いクローン兵士を大量生産し、このシーバルーを我が物にした次はドルゴ大陸へ進撃。いずれはラプチナとクロニケルにも攻撃を仕掛け、世界を手に入れる。それが私の願いなのだよ!』

グスタフは声を荒らげ、嬉々とした声でそう語らった。姿は見えないが、どこかで大手を振って力強く語っている姿が目には浮かぶ。

だがあまりにも下らなかった。下らな過ぎる。ガキが将来の夢を語るかのようなテンションで饒舌になるのは勝手だが、その内容はガキの発想以下だ。

世界を手に入れる?笑わせてくれる、今どきそんな言葉耳にするような機会があったとはまさに夢にも思わなかった。馬鹿馬鹿しいにもほどがある、そんな発想は漫画の読み過ぎだと思ってしまう、虎眼は床へ唾を吐き捨てた。

『虎眼君・・・強い軍隊が最も必要としているものは何か、知っているかね?』

「・・・勝利」

『それは最終的に手に入るものだ、答えとは少し違う・・・力だ。武力だ。それ即ち、強い兵士だよ』

『強い軍隊に必要なのは常に強い兵士のみ。敵を目の前にした時確実に倒すことのできる力、敵を倒すための戦略を練るこのできる知能、そして敵を倒すための武器や兵器を操る技術、それらを兼ね備えた強い兵士が欲しいんだよ。そうでなければ戦争にも勝てないし、国獲りなんて夢の話で終わってしまう』

「分かりやすい話だな」

『だがそんな強い兵士は簡単には手に入れられないのが現状だ。1から兵士を育て上げるのには時間も金もかかりすぎるうえに、どうしても才能で左右されてしまう。全てを兼ね備えた本当の強い兵士とは我が軍の中でさえほんの一握りしかおらん』

『そこで私はこう考えたのだよ・・・強い兵士を育てることができないなら、強い兵士を物理的に増殖させることはできないか?とね』

「・・・話が見えんな」

『10年位前から夢を見始めたんだよ、現状のフェイファー・ツェリザカではまだまだ力が足りない。近い将来、我が軍はドルゴ大陸へ進軍するつもりでいるのだが・・・生憎そのための力がまだ不足しているんだよ』

「国内の半分の武力を握っているくせに、よく言えたものだな」

『褒め言葉として受け止めよう・・・私の考えは今言ったとおり、強い兵士の増殖・・・砕いて言えば人間の複製だよ。理想的な強い兵士をたった一人育て上げたとして、それ以降はその兵士を何人も何人も複製して、真の最強軍隊を作り上げたいんだよ』

「人間の複製・・・どこかで昔聞いたことがあるな、「クローン」だったか?」

『その通り、クローン人間の大量生産・・・それが私の夢だ。より強いクローン兵士を大量生産し、このシーバルーを我が物にした次はドルゴ大陸へ進撃。いずれはラプチナとクロニケルにも攻撃を仕掛け、世界を手に入れる。それが私の願いなのだよ!』

グスタフは声を荒らげ、嬉々とした声でそう語らった。姿は見えないが、どこかで大手を振って力強く語っている姿が目には浮かぶ。

だがあまりにも下らなかった。下らな過ぎる。ガキが将来の夢を語るかのようなテンションで饒舌になるのは勝手だが、その内容はガキの発想以下だ。

世界を手に入れる?笑わせてくれる、今どきそんな言葉耳にするような機会があったとはまさに夢にも思わなかった。馬鹿馬鹿しいにもほどがある、そんな発想は漫画の読み過ぎだと思ってしまう、虎眼は床へ唾を吐き捨てた。

「で、それと俺が何の関係がある？」

『結果から言おう・・・この10年間で生み出されたクローンの数は0だ。人間の複製という技術はそれこそ未だ小説の世界の話でしかなくいざ実行に移すにはまだまだ技術の進歩が足りない。過去にあらゆる軍事機関を叩き潰し優秀な技術者を引き抜き総動員したところで、人工的に人間を複製するのは不可能だった』

『しかしここ一年である進展がみられたのだ、クローン人間の再現に必要なエネルギーを蓄積した物質の発見だよ』

「ほう・・・そいつは大きな一歩だな」

『それを見つけた当初はそんなものだったとは到底思えなかったが、調べていくうちにそれが珍しい高エネルギー体だと知ることができたんだよ。その調査の背景で、実は君たちの存在も知った』

「高エネルギー体？・・・っ！？貴様、まさか！？」

『フフフフ・・・その材質は100%炭素、金剛光沢をもち炭素原子の共通結合によりその強度は世界最強の硬度を誇る。占いの世界においてその石に込められた言葉は永遠の絆・純潔・不屈など・・・』

『人々はその石に敬意込めてこう呼んだ・・・**ダイヤモンド**とな！』

「・・・っ！！」

完全に予想外だった。いや、予想はすでに立っていたのかもしれないがあえて見て見ぬふりをし続けてきたのかもしれない。シナリオで言えば、それが最悪なパターン、バッドエンドそのものだったから。グスタフの語るその高エネルギー体、ダイヤモンド、それはほぼ間違いなく探している旅の目的の一つだった。

連中は虎眼たちが宝石の搜索を依頼されて旅をするその前からこのことに気づいていたらしい。悪い方に考えるが、おそらく宝石の意味も把握しているかもしれない。

絶対に招きたくない最悪の状況に虎眼の心境は恐れを抱き始めた。何かまずい、何かヤバイ、何か・・・とにかく何か危険な予感が止まらず胸の奥がザワザワして落ち着かなくなる。一刻も早くここから逃げ出さなければ・・・そう思えてしまい再び全身に渾身の力を込めて脱出を試みるが、やはり鎖はビクともしなかった。

『その装置が完成したのは数日前、ダイヤモンドの持つ強大なエネルギーを抽出しこちらでインプットしたデータ通りに君の目の前の装置が出力してくれる。君はその実験の記念すべきサンプル1号だよ』

「クソッ！俺に何をするつもりだ！！俺をここから解放しろ！！」

『まあそう言うな・・・成功すれば、それはきっと君にとっても有益な結果になるはずだろ？』

グスタフが言うや否や、3つの機械がそれぞれ起動し始めた。左右の鉄柱が全体に電流を帯びてバチバチと鋭い音を上げ、正面の機械の銃口が同じようにバチバチとエネルギーを充電している

。

「っ！！！」

そして、その時はきた。

バリイイイイイイイイイイ！！！！！！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

3つの機械が放電を開始し、そのすべてのエネルギーが虎眼の体へぶつけられた。

電撃を食らった瞬間、虎眼は落雷の直撃を食らったような比べるものがない激痛に耐えることができず悲鳴を上げた。凄まじい電流が体の中を縦横無尽に駆け巡り、全身の隅々まで余すことなく均等な痛みを与えてくれた。

それと同時に、虎眼の体の中ではかすかな違和感もあった。今まで感じたことの無い不思議な感覚だった。激痛の中、意識もほとんど飛んでいつ最中、例えにくいが・・・それはまるで肉体が離れるような。

猫眼の意識と、虎眼の意識が、一つの肉体から離れてしまうような、そんな奇妙な感覚だった。

所変わり、ここは虎眼を監禁している実験室の隣に設けられた専用の研究室。

隣とはいってもこの研究室は実験室と1mの鉄板を挟み、さらに強固な防弾ガラスで遮られているほとんど実験室とは隔離されたとても安全な部屋なのだ。ガラスの表面には特殊なマジックフィルムを張ることで実験室からはこちらの様子を窺えない構造になっているので、虎眼がいくらこの場所を探そうとしても一見しただけでは見つけることは絶対にできない仕掛けになっている。

複数のモニターと数えるのが面倒くさくなるほどの数を有する謎のスイッチやツマミがズラリと並ぶ機械をいじる5人の研究者たちと一緒に、グスタフがガラスの向こうで電撃を食らい悶絶している虎眼を眺めていた。実験室は防音なので今はこちらからは何も聞こえないが、虎眼が今どれだけの苦痛を与えられているのかその表情を見ただけで容易に想像できてしまう。

「ククク・・・データどうだ？」

「はい、体内で僅かな細胞の分裂反応を確認しました。出力60%で安定、対象の肉体的変化に異常はほとんど見られません」

「まだるっこしいな、75%まで一気に上げろ」

「しかし、対象にかかる負担は・・・？」

「聞こえなかったか・・・？出力を上げろ」

「り、了解・・・」

一人の研究者がグスタフの命令に応じ、椅子から立ち上がって出力装置へ近づいた。その機械にはグスタフが手に入れたダイヤモンドが封印されておりダイヤモンドが持っている魔力を機械が

吸い取り、魔力をコンピューターで制御し入力したデータをエネルギー的に虎眼へ照射させているのがこの機械だ。研究員がその機械の出力調整用のマズルを捻り、照射エネルギーを上げた。途端虎眼へ浴びせられる言劇の威力が強くなり、虎眼はさらなる悲鳴を上げ始めた。部屋全体から光が乱反射し、この光景を見ている側からすれば非常に眩しく一瞬目がくらみかけた。

「フム、今度はどうだ？」

「ハッ・・・細胞分裂反応の上昇を確認、肉体分離率10%、今12%へ上昇。出力75%で安定、このままいけば恐らく・・・」

「ククク、実験は成功ということか・・・ラストスパートだ、出力を90%まで一気に上げろ！」

「なっ！？いきなりそんなことをしてしまったら、彼の体が持ちません！今の状況でも十分危険です、これ以上は」

バンッ！！

研究室内で銃声が鳴り響いた。銃口から煙を吐き出している銃を持っているのはグスタフで、今一人口答えをした研究員を打ち殺した。頭を正面から一発、即死なのは言うまでもない。彼が殺された理由は、好奇心の塊となったグスタフの気を害したからという、あまりにもつまらない死因だった。

グスタフは軽く舌打ちをしながら銃をしまうと、自分で機械の調整マズルを捻った。75%から一気に95%まで捻り回した途端、実験室内で強烈な閃光が放たれ研究者たちが思わず目を逸らしてしまった。グスタフもその場で目を塞ぎ、これでこの時実験室内で何が起こったのか知る者はいなくなった。

そう・・・この瞬間に起きた奇跡を、誰も似ることはなかったのだった。

目が潰れてしまうことを恐れたグスタフがようやく調節マズルを掴み、やっとの思いで出力を一気に0まで引き戻した。それと同時に実験室内から満溢れていた光が止み、研究員たちが徐々に目を開き始めた。グスタフもようやく目の痛みが治まり瞼を持ち上げると、実験室の窓までゆっくりと近寄り中の様子を確認した。

グスタフに釣られる様に研究員たちもそれぞれ椅子から立ち上がり窓から様子を窺ったとたん、誰もが自分の目を疑った。そしてそれはグスタフも全く同じ様子で、思わず目を大きく見開くほどだった。

実験室内で、驚愕の変化が発生していた。壁に張付けにされた虎眼は数分間に及ぶ落雷に匹敵する巨大なエネルギーを浴び続けたせいで完全に気絶し、全身からは煙を吹き出し肉の焼ける異臭すら漂っていることだろう。

それともう一つ、最大の問題がその虎眼の足下に現れていた。それは虎眼と同じく体中が焼け焦げ煙を吹きながら床の上に突っ伏していた。

それは生憎身に着けているべき服は何も着用していなかったが、おまけに気を失っているせいで生きているか死んでいるか全くわからないが、それは紛れもなく虎眼に対するもう一人の虎眼・・・即ち猫眼だった。

一つの部屋の中に、二人の人間が全く同じ状況で気絶している・・・これが何を意味しているのかに気づくまでたっぷり1分を費やしてしまった。

・・・成功したのだ。フェイス・ツェリザカの技術は、人間の分離が、クローン人間の誕生が、たった今、確実に成功した瞬間だった。

グスタフの固まり続けていた表情筋がここでようやく緩みを見せ、口元が大きくゆがみ頬肉を釣り上げた笑みを浮かべた。

「・・・成功した・・・成功したのだ！我が軍はついに！！クローンの開発に成功したのだ！！！」

「お、おめでとうございます総統閣下」

「フハハハハハハハハハハハハ！！これで我が軍の未来は安泰だ！！世界は、我が物とすることができるのだ！！！」

「はい、その通りです総統閣下。ではそろそろサンプルのメディカルチェックへ移ります」

分厚い眼鏡をかけたこの研究の管理責任者の男がそう言って再び席に戻ると、残りの研究員たちもそれぞれ自分の持ち場に着き直して手元のコンソールやモニター画面を確認し始めた。

現在の虎眼の身体データは両手足を繋いだ手錠に仕込まれた機械からチェックすることができる。それによると現在虎眼はこの人名の安否を無視した実験により血圧が上昇、及び心拍が乱れ心臓の鼓動がかなり不規則になっているようだ。やむを得ないと判断した研究員が手錠にスタンガン程度の電流を流すと、虎眼の体が一瞬ビクンッ！と跳ね上がり、再び鼓動を始めた心臓の動きは元に戻すことができた。

だからと言ってなにも油断できた状況ではない。サンプルの声明を優先するのであれば今すぐにあの手錠を外し、医務室に担ぎこんで適切な処置を施さねばならないのは明白だった。このまま放置してはきっと虎眼はあと1時間生きることすらも危ういと思われる。

「閣下、サンプルの体力がもう限界を迎えているようです。今日のところはこの辺りで終わりとし、新たな実験はサンプルの回復を待ってからにしては・・・」

「貴様は何の権限を持ってこの私に意見しているのだ？」

大雑把なデータから虎眼と猫眼の体を休ませようとする旨をグスタフに話した直後、グスタフは再び何の躊躇もなく主任のこめかみへ銃口を突きつけた。一瞬小さな悲鳴を上げて椅子から落ちてしまいそうになりながらもその場で踏ん張ると、ここでようやく今のグスタフの顔を見ることができた。

グスタフは今、いわゆる完全にイッてしまった表情をしていた。両瞼は限界まで持ち上げられ、瞳孔の開いた瞳に嬉しそうに歯肉まで剥き出しにした満面の笑顔。その表情で銃を構える姿はまさに「狂っている」と題名をつけた絵そのものだった。

「クククク・・・実験はこのまま続行する。もう一度だ、もう一度あのサンプルにさっきと同じエネルギーをぶつけろ！！」

「なっ！？お言葉ですが閣下、彼らの体はたった一度の実験で限界まで疲弊しています。このままもう一度同じエネルギーを浴びせてしまったら・・・彼等は間違いなく死んでしまいます！」

「それがどうした、実に丁度いいではないか？人体の複製に必要なエネルギー量が分かったら、次は連続で複製した場合における人体の限界値・・・一度に何人で複製できるかの実験だ。あのサンプルにはその実験に協力してもらおう、途中で死んだのならばそれはそれで貴重なデータではないのか？んん？」

「いや・・・ですがしかし」

「同じような実験の為に、今まで何十人のサンプルを死なせてきたんだ。今更新しい死体が増えたところで何を臆する必要がある？」

今のグスタフはこの長年の夢をかなえる為の大切な実験に成功したことによって精神的絶頂を迎えており、思考回路がまるで狂ってしまっている。人命を砂漠の砂一粒程度の価値しかとらえていない彼だからこそ言える発言であり、彼だったからできるこのおぞましい行動だった。

主任は周囲からの視線を浴びつつ、今度はあのサンプルではなく自分の生命の危機を察知して冷や汗が流れ落ちた。先ほどグスタフに殺されてそのまま放置されっぱなしの死体をチラリと見てしまうと、思わず口内の唾を飲み込んで恐怖した。自分もあのような姿になるのかと思うと、恐ろしくてならない。殺されないようにするためには、今はただひたすらグスタフの機嫌を損ねないような行動をとることが最優良の方法なのだが、それでも主任は納得できない様子だった。

「し・・・しかし今後のことを踏まえると、あの貴重なサンプルをこれ以上傷つけるのはいかなものかと・・・」

「・・・よし分かった。お前は私の指図するのだな？いい度胸じゃないか」

もはや何を言おうがグスタフの耳には何も届く様子など微塵もない。逆に神経を逆なでし怒りを買ってしまった。

グスタフの引き金に触れている指が徐々に引かれ始め、主任は自分の死を覚悟してとっさに両眼をつむった。

その直後・・・

ドゴオン！！！！

突然部屋全体が大きく揺れ出し、グスタフは手にしている銃を取りこぼし研究員たちは皆椅子から落ちかけてしまった。何事かと思ひ少しジッとしていると、さっきと同じ振動がもう一度襲いかかってきた。その衝撃は一撃目よりも明確なほどに強かった。

「ぐっ！何事だ、地震でも起きたのか！？」

「そんなハズはありません！この近辺の大陸にはこんな大きな自信を発生させるほど大きな地殻プレートは存在など」

ドゴオン！！！！

「まただ、だが実際に今建物自体が揺れているではないか！？」

「何かおかしいです・・・あ、ああ！！閣下、あれを見てください！！」

一人の研究員が信じられない物を目撃し、実験室の窓ガラスへ指差した。何が起きているのか興味の手間人間全員が窓に張り付いて中の様子を窺うと、そこには確かに信じられないような光景が目映った。

改めてもう一度説明するが、この実験室はその実験内容の過酷さと危険性を想定し周囲を1m分の分厚い鉄板を何枚も重ね合わせて決してこの部屋からは誰も逃げられないように仕組まれている。さらに言えばこの部屋は建物内に複数設置している移動用のエレベーターではなく、専用の隠しエレベーターでなければ辿り着くことのできない仕様になっている。あの実験室に唯一の出入り口があるとすれば、床下からの専用階段を使うか研究室のガラスをたたき割るしか方法はない。

そんな実験室の床に、今大きなヒビが入れられていたのだった。しかもそのヒビはあの巨大な衝撃が巨大になる度に規模を増し、床全体を山のように大きく盛り上げている。

床にももちろん複数枚の強固な鉄板を敷き詰めて破壊なぞ不可能だと完全にタカをくくっていたが・・・その意識はこの瞬間皆頭の中から吹き飛んでしまっていた。そしてついに・・・

ドガゴオオオオン！！！！！！

床がとうとう破壊され、実験室の真ん中に大きな穴があけられてしまった。いったい目の前で何が起きているのか全く予想のできない研究室内の人間は全員、ただ愕然としながらその様子を閉じなくなった口を大きく開けながら見守ることとなってしまった。

エレベーターの電源が落とされてしまい、仕方なく階段で上を目指すこととなってしまったジン達フェイス・ツェリザカぶっ殺し進撃隊。もう自分たちが今何階にいるのかもわからなくなり数えるのもやめてひたすらに襲い来る敵連中を返り討ちに行っている途中、突然アゲートが何かに反応を示した。

階段を駆け上る途中で急に立ち止まりあたりをキョロキョロ見回しだしたかと思えば、今度はいきなり拳骨ハンマーで壁を破壊し始めた。それだけに留まらずアゲートは数回壁を破壊しながら進んでいたら、今度は急に天井を破壊しながら上へと目指しだしたのだ。一体何がアゲートをこんな奇行へ追いやったのか聞いてみたところ本人曰く・・・

「声が聞こえたさ・・・この上から兄貴の音が聞こえたさあああああ！！！！」

アゲートがそんなことを言い出したのとまったく同時刻、当の虎眼は確かにこの瞬間大きな悲鳴を上げていた。本当に聞こえていたのかは定かではないがあのアゲートがここまで本気になって天井を破壊しながら移動するということはその発言にまんざら嘘もないのかもしれない。

そんなこんなで天井を破壊しながら突き進むこと幾星霜、最後の一枚と思われる天井が異常なほどに硬かった。しかし今のアゲートには不可能など存在しておらず、持ち前の馬鹿力と虎眼を救出したいという一念で分厚い鋼鉄の天井へ拳骨をぶつけ続けること13発目・・・とうとう天井が破壊された。

だがこの部屋に一番乗りで侵入したのは悲しくもアゲートにあらず、本人はここまで来てついに息が切れてしまい全身の筋肉を痙攣させながらその場でノックアウト。杖に乗ったジェットが一番で部屋の中に侵入するとその後を追うようにドクターとジンが倒れたアゲートを担いで侵入。

「んん・・・なんだここ？」

「真っ白い部屋だね。思わず黒いペンキの入った缶を放り投げてしまいたくなるようだ、キシキシ」

「つまんねえこと言ってんな・・・つうかお前大丈夫なのか？」

「ゼヒュ～・・・ゼヒュ～・・・諦めたらそこが終点・・・さあ」

「ダメだ、ついに意識が混濁しているようだね」

「いよいよコイツもお頭を取り換える時が・・・んん？なんか臭くねえか？」

杖から降りたジェットが鼻をヒクヒクさせると、鼻の奥を刺激する不快な異臭が部屋全体から漂っているのに気が付いた。ジンとドクターも嗅いでみるとジェットの言う通りこの部屋の中は異様な臭いが立ち込めている。生肉が焦げたような異臭だった。

その正体はジンが発見した。振り返った背後の正面の壁に誰かが張り付けられている。鎖と手錠で拘束されているその人物は全身が黒く焼けただけ、生きていいのかすらも疑問にさせる風体をしていた。

状況はうまく飲み込めないがこのままあれを見過ごしておくのも忍びなく、ジンはさっそくその

人物を拘束している手錠を切り裂き、力なく倒れてきた彼を肩に担ぐように受け止めた。そこまで来てようやくこの人物が誰なのかを目の当たりにしジンは目玉を飛び出させて驚愕した。何せ今肩に担いでいるこの黒焦げの正体があの虎眼だったのだから驚かない方が不自然だろう。普段の虎眼の実力を知っているジンならばそのリアクションも不必要なほどに大きくなって当然だ。

「え・・・虎眼？ちょっと待て、こいつ虎眼だぞ！！」

「ハァ！？その焼死体もどきが！？」

「・・・兄貴・・・兄貴iiiiiiiiiiii！！！！」

虎眼という名前に反応したアゲートがこの瞬間に覚醒、ドクターの肩から競馬の馬みたいに力強く出走するとさっそくジンから虎眼を奪い取って自分の腕の中に収め、その姿を確認した。

「兄貴、間違いなく兄貴さ！！兄貴、死んじゃだめさ！！目を覚ましてさ兄貴iiiiiiiiiiii！！！！」

「どうなってんだ？なんで虎眼がこの程度の鎖につながれて、こんな黒焦げに？」

「アタシが知るかよ。てかこのままじゃコイツやばいんじゃないのか？」

「兄貴iiiiiiii！！目を覚ましてさ、兄貴iiiiiiii！！！！」

状況を整理しようとしているジンに対し、丸焼きになった虎眼を見てさっきから混乱しているアゲートは生き返ってほしい一心で虎眼の頬を叩き出している。右へ左へ、手の平と甲を使いながら激しい往復ビンタを続けた。意識を失っている人物にこのような行為は本来やっていいことではないのだが、そんなことを知らないアゲートは無我夢中になってビンタの応酬を続けた。虎眼の両頬が腫れ上がろうが、虎眼の首が左右に大きく揺さぶられようがお構いなしにアゲートはビンタを続けた・・・すると

「いい加減にしろこのタボがあああ！！！！！！」

効果あってかはたまた偶然か、突然目を覚ました虎眼がアゲートの顔面へ拳がめり込むほど強烈な右ストレートを発射した。反対側の壁まで吹っ飛ばされたアゲートもそうだが、その場にいた全員がほぼ同時にビックリした。何はともあれ、虎眼は今こうやって全身を黒く焼け焦がれようが立派に生きていた。しかしもとから体力を奪われていたせいなのか、虎眼は今の一撃だけで息を切らしもう一度ジンの肩へ重い頭を落としてしまった。

「はあ、はあ、はあ・・・すまん、俺としたことが不覚を取ってしまった」

「何があったのかは知らねえが今はいい、とにかくさっさとここからトズラすっぞ」

「もっぱー！あみみふあいふいふあえっぱー！！（やったー！兄貴が生き返ったー！！）」

「アゲート、そのケツの穴みたいな顔はやめろ・・・アタシ今は笑う気分じゃねえ」

「（スッポン！）よっしゃ元通り！さっさとこんなところから逃げるっさ！」

「元気だなお前・・・ドクター急ぐぞ！」

「・・・・・・・・」

「・・・ドクター？」

一騎当億の実力を持つ虎眼がただの鎖につながれて黒焦げにされていたということばかりに気を取られていたが、ドクター帆途中でもっと信じられない物を誰よりも早く目撃していた。

虎眼のそばに倒れていたもう一人の人物がいる。その人物は女性だった。しかし彼女はどのような理由なのか生まれたままの姿で突っ伏したままでいたのでかわいそうに思い、ドクターが自分の白衣を着せてやっている途中に気づいた。

目の前に発生した考えられない現象、ありえない事実、不可能だとばかり思ってほぼ諦めていた考察・・・そのすべてが今ドクターの腕の中で気を失ったまま眠っている。

「どうしたんだ？」

「・・・バンダナ君、そこにいるのは本当に虎君なのかい？」

「え？そうだけど・・・なんでさ？」

「偽物という可能性は？虎君によく似ているが全くの別人という可能性は？」

「何言ってるさドクター？ここにいるのは正真正銘本物の虎眼の兄貴さ！あんま酷いこと言っているとオレっち怒るさよ！」

「どうしたんだドクター？ん、そいつ誰だ？」

「ありえないんだよ！！そこにいるのが本当に本物の・・・あの古虎眼だとしたらこれは一体どう説明する！？彼女は一体誰なんだ！？」

ドクターにしては非常に珍しい、今まで見たことの無いくらいの慌てっぷりにほかの四人は困惑させられた。ドクターの周囲に皆が集まると、ドクターはゆっくりと床にうつ伏せで倒れているこの人物・・・彼女の体を仰向けになるように両手で優しく持ち上げた。

途端、全員の表情が固まってしまう。ドクターの腕の中に居る彼女の正体は、まぎれもなく猫眼その人で間違いなかった。虎眼と同じく体中が火傷だらけで今もなお気絶しているがかすかに息をしている。猫眼もまた虎眼同様、何とか生きていたといった風体だ。

「え・・・ええええ！！？？猫眼の姉御がこっちにいて？虎眼の兄貴がこっちにいて？あれ？兄貴の初期設定ってこんな感じの双子だったっけ？？」

「混乱しすぎだ・・・すまん、俺にも何が何だか・・・頭が痛くて仕方ない」

「ああもう何が何だかアタシにも訳が分からん・・・頭ん中がこんがらがる」

「ああああ・・・もう考えるのも面倒くせえ！とにかく今はここから出ることを最優先！！話はその後！！とっとと逃げるぞ！！」

何が何やらいろいろ考えさせられることが多すぎて頭がパンクしてしまう前に考えるのをやめたジンが虎眼を肩に担ぎ、猫眼をドクターがその小さい背中におんぶして一行はとにかくさっさとここから出てしまおうと走り出した。

それだというのに・・・空気の読めない最悪の男が現れてしまった。

「待て貴様らああ！！」

その声の主はグスタフ本人の物だった。声のする方向を全員が見上げると、研究質とこの部屋を繋いでいたマジックミラーが展開され中からグスタフが身を乗り出していた。

その表情はまさに鬼気迫るもので、彼自身が本物の鬼になったかのような形相をしている。要するにとんでもなく激怒した表情という話なのだ。そしてその右手には研究機材から抜き取った例のダイヤモンドと左手には拳銃が握られており、服やブーツには多くの血液が付着している。

この時のグスタフがこれほどまでに憤怒しているのはふたつの理由がある。自分の目の前で大切

な実験サンプルが奪われてしまうのを目撃したから、もう一つは今の床の破壊の巻き合いで人体コピーを可能にした発明品が壊れてしまったこと。

頭にきたグスタフは連中に天誅を下してやると意気込み壊れた機械の中から無理矢理この機械の心臓部だったダイヤモンドを引っ張り出した。この際だと言ってこれの力を使ってジン達を殺してやると意気込んでいたのだが研究員たちが必死にそれを阻止、完全にキレてしまったグスタフが研究員を一人残らず射殺。機械のパネルを自分でいじってマジックミラーを開けて今、ジン達の前に姿を現したのだ。

「その二人を置いて行け！！そうすれば貴様らは殺さないでおいてやっても構わん、断ればここで殺してやる！！」

チープな脅し文句と交換条件を付き出したグスタフがキレ顔のまま息を荒立て、銃口を適当に構えた。当然そんなものに屈する一行ではないので、返事代わりにジンがグスタフへ向かって右手こぶしを突き出し、中指を立てて一言つぶやいた。

「・・・FACK」

もう自分の頭にはこれ以上切れてしまう血管なんか無いと思っていたが、ここにきて新たにブチキレてしまった。今まで通り何のためらいもなく引き金を引くが、拳銃は弾丸を発射する前にスライドがストップしてしまいマガジン内の弾切れを宣言してしまった。もうこうなってしまっただけならまだいいが、この銃は弾が無ければ使い物にはならないし、生憎手持ちの弾丸は全弾さつき使い切ってしまったばかりだった。

舌打ちをして銃を放り捨てると、今度は最後の頼みとばかりにダイヤモンドを掲げた。神様に供物をささげるように、両手で抱え高々と。

そしてグスタフはまるで呪文を唱えるかのようにダイヤモンドへ語りかけ始めた。

「宝石に秘められし神秘の力よ、この私に力をよこせ！！私は力が欲しい、強い力が欲しい！！全ての敵を薙ぎ払い、この世界すらも我が手中に収めることができる絶対的な力が、神にも匹敵するような力が欲しい！！！」

「・・・アイツいきなり何言ってるさ？」

「放っておけ、耳を傾けるとバカが移るぞ」

「キシキシ、彼がこれ以上バカになれるのかね？」

「それもそうだな、前言撤回するわ」

「オレっち泣くよ？」

「うう・・・宝石・・・ダイヤモンド・・・しまった！！！」

ジンの肩に担がれていた虎眼が重要なことを思い出し、両目を全開まで剥いてグスタフへ向き直った。奴はダイヤモンドを持っている、ダイヤモンドの力と科学の力で、自分の体は分離した。それを思い出した。

「兄貴、どうしたさ？」

「ジン！！急いで引き返してグスタフを止めろ・・・いや、今すぐに殺せ！！」

「なんだよ急に？」

「キシキシ、あんな馬鹿放っておいたところで何の害も」

「奴は持っているんだ！！忘れていた、奴が持っているのは、ダイヤモンドだ！！！」

必死の形相を浮かべる虎眼の言葉に嘘はない。全員が首筋に氷を当てられたような冷たい悪寒を感じ取り振り返ると、グスタフが何かを両手で抱えて頭上高く持ち上げているのが見えた。その手に持っている丸く光り輝く透明な石は、まぎれもなくダイヤモンドだった。

それをあのグスタフが持っている・・・ここまで来たらジン達のがに今の現状の最悪さ加減をようやく理解することに成功した。

だがすべて時すでに遅し・・・。

「全てが欲しい！！領土も、力も、名誉も、世界も！！この世のあらゆるもの全てが欲しい！！我が野望の声が聞こえているのならばダイヤモンドよ・・・私の声に答えろ！！！」

続く

おまけ

ネタが煮詰まっている最中にインフルエンザにかかるのってものすごく怖い。

体を治すことに集中するあまり製作のことを忘れちゃう。

サービス業をしているとこの時期休みもないし製作時間なんか真夜中だしすごく眠くてなかなか捗らなくて困る。

必死で書き上げました。

読んでいただければこのド素人作者、大変光栄です。

読んでくれた皆様、心の底から感謝いたします。

もう少し掲載する間隔を短くしたいと思い励んでみます。

伝説の燃料問題

海竜「リヴァイアサン」、李倍朝霞と海獣「クラーケン」、蔵馬健の二人が地上のアパートに引っ越してきて早半月。荷物の整理や近隣住民との交流もひと段落し、今日も新しい一日がおとなしく幕を開けた。

この日の朝食は塩鮭に身玉焼き、ご飯味噌汁ほうれん草のお浸しに牛乳という実にありふれたメニューだった。ちなみに二人にとって味噌汁の具の定番は岩のりとワカメ。みなさんはどんな具が好みだろうか？

とまあそんな話は次の機会に回すとして、今日も二人は実におとなしく飯にありついていた。黙々と静かに食べるあーさんに対し、今日もケンさんはテレビを眺めながら箸を進めている。

「・・・なああーさんよ」

「んん？」

「突然気になったんだけど、メタンハイグレードってなんだっけ？」

「どこでそんな難しい言葉覚えてきたんだ？そんな言葉記憶できる脳みそなんかあったのか？」

「天日に干して旨味増したろかこら#。そうじゃなくて、何か前にニュースで聞いた記憶があんだけっど・・・それがなんだったか思い出せん」

「んん～・・・あれだよ、メタンガスを海底の水圧で結晶化させた固体燃料。ほれ昔近所の皆とバーベキューすつとき何かにその辺で拾って使ったあれだよ」

「ああ、思い出した！あれか！？」

「それがどうしたの？」

「あれってさあ、人間どもが急に最近話題に取り上げてるよなあ？」

「そう言やそうだな。来たるべき燃料危機に備えた新しい資源とか言って開発に躍起になってたっけ」

「それぞれ、それで思いついたんだけどよう・・・自分達がそれかき集めて開発チームに売りつければ高く売れて金になるんじゃないか？」

どうも健さんは自分の小遣い稼ぎの話をあーさんに持ちかけてきたらしい。最新エネルギー資源に着眼したまでは良かったがこの提案には穴がある。それに気が付いていたあーさんは味噌汁をすすりながら指摘する。

「精々二束三文・・・」

「なんで？」

「あの燃料、今の人間どもの科学では実用化はまだできないって話じゃん？そんな不完全なもの売りつけられたって精々実験用のサンプル扱いで購入されて、その程度の小金で終わり」

「なんでだよ！？将来を見据えた資源なら誰だって欲しがりに決まってるじゃん？世界の戦争の理由だって、ほとんどは石油が絡んだ理由ばっかだろ？誰よりも多く石油が欲しいから戦うんじゃないのかよ？」

「間違っていないかもしれないけど・・・人間って生き物は不完全なものに対して毛嫌いする癖があるんだよ。『誰が何にどんな実験をしてこんな成果が得られました』って正確なデータが提示されなきゃ、誰も信用して金を出してくれないの」

「なんだよ、要するにチキンってことか？どうしようもない連中ばっかだなあ。こうやってテメエら人間が飯にありつけるのは太古の大昔、人間の先祖がそれを口に入れて美味かったからだろ？この植物は食える、この茸には毒がある、あの魚は食用になる、その動物は不味い。こうやって何事にも挑戦したからこそこの世には『飯』があるんじゃないかよ？」

「それには俺も激しく同意。けどただ単に臆病なだけじゃなくて、そうやって技術が発達したことで確実なデータを算出する術を得て、人間は短い寿命を必死に伸ばそうとしてんだよ。臆病なんじゃなくて、必要以上に『慎重』なだけ」

「臆病も慎重も同じだよ。」

ケンさんは自分の提案が却下されたことに腹を立て、つまらなそうに鮭にかぶりついた。
それからしばらくまたテレビを眺めながらポーッと箸をかじっていると、ここでまた新たな悪知恵を思い付いてしまった。

「そうだ！さっきの話の続きになるかもしれねえけどよ・・・」

「んん？今度はなんだ？」

「新しい資源で小遣い稼ぎはやめにするわ。その代り現存する燃料でひと稼ぎってのはどうだ？」

「石油でも掘り当てるともりか？」

「別に自分たちで油田を作るわけじゃねえよ。海底で石油がまだ大量に眠ってるところを自分達で見つけて、それを御国様に買い取ってもらうんだよ！」

「ふ～ん・・・当てはあんのかよ？」

「とりあえずまずはインド洋にでも今日あたり繰り出そうぜ！確かこの間その辺でそれっぽい物を見かけた記憶があるんだ。買い取りはそうだなあ・・・サウジアラビアが有力だが、いっそのこともっと高値で買ってくれそうな中国やロシアなんか・・・あ、アメリカなんかもいいかもな！」

「インド洋ねえ・・・それって果てしなく無謀だってこと分かってて言ってるのか？」

「へ？」

「あの辺を統治している連中の目を盗んで油田を見つけて他国に売るなんて本気でできると思ってんのかよ」

「・・・あ」

「ガネーシャならともかく、シバやカーリーなんかに見つかったら速攻で通報された上に俺達切り刻まれてカレーの具にされちまうぞ？それでなくとも、もしも釈迦公を筆頭とした仏教連中に捕まってみろ。座禅組まされて、お経読まされて、最悪頭丸坊主だぞ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「金はもっと地道に稼ぐか」

「それが一番いい」

「ところでご飯おかわり」

「釜にあるから自分でよそえ」

そう言ってあーさんはこの話を完璧に終わらせ、ケンさんもすべてを諦めて茶碗に飯をよそい箸を進めた。

そんな二人の会話を隣で聞かされていた隣人、沖野海人君はお手製ピザトーストを食べる手を止めて穴を塞いでいるカーテン越しに激しく大きな息を吐いた。

今日は今朝からとんでもなくディープな会話にツッコミもままならない有様だったではないか。

「何かとんでもない大事件が起こる瞬間に立ち会ったような気がする・・・」

それは決して当たらずとも遠からずな微妙な距離感の中での出来事だった。彼は今日も何も起こりませんようにと心で祈りつつ、トーストを野菜ジュースで胃の中に流し込んだ。